

## 『スーフイズムと老荘思想—比較哲学試論』(上・下)

(井筒俊彦著、仁子寿晴訳、慶應義塾大学出版会、2019年)

おやさと研究所講師  
澤井 真 Makoto Sawai

本書は、イスラーム哲学および東洋思想の碩学として名高い井筒俊彦(1914～1993)の代表作の一つである英文著書、*Sufism and Taoism: A Comparative Study of Key Philosophical Concepts* (1983)の待望の邦訳である。

## 井筒俊彦とその著作

井筒俊彦は東洋思想のみならず、西洋思想にも深く精通した思想家であった。しかしながら、彼の名は以前、イスラームの聖典『コーラン』(岩波文庫)をアラビア語原典から最初に邦訳した慶應義塾大学教授として、ごく一部の研究者たちのあいだで知られていたにすぎなかった。彼が長年、海外で研究生活を送り、著作の大部分も英語で著していたこともあり、彼の名はむしろ日本よりも海外で広く知られていた。井筒の名が日本で広く知られるようになったのは、1979年、イラン革命によってイラン王立哲学アカデミーを離れて、日本への帰国を余儀なくされてからであった。『意識と本質』(1983)をはじめ、日本語で出版された著書は、数多くの読者に愛読されている。

井筒の日本語著作は、これまで「井筒俊彦著作集」(中央公論社、全10巻、1991～1993)によって知られてきた。近年、出版された「井筒俊彦全集」(慶應義塾大学出版会、全12巻+別巻、2014～2016)には、彼の論文などもすべて収録され、井筒が日本語で著した思想の全容を窺い知ることができる。しかし、井筒の日本語著作のみに触れてきた読者は、それだけでは「本当」の井筒を知らないと言えるかもしれない。筆者自身、海外の研究者たちとイスラーム哲学などについて議論するなかで、井筒俊彦を高く評価する人々そして、時には熱心な井筒ファンに幾度も出会ってきた。様々な研究分野の研究者たちにも読まれている井筒は、私たちの前に聳え立つ知の巨人である。井筒が英語で著した著書も、ようやく「井筒俊彦英文著作翻訳コレクション」(慶應義塾大学出版会)として順次邦訳され、本書の出版をもって完結した。ここに井筒思想の全貌を日本語で読むことができるようになった。

## 構成と概要

本書の構成は、以下の通りである。

- 第1部 イブン・アラビー(全17章 上巻)
- 第2部 老子と荘子(全12章 下巻)
- 第3部 結論—比較考量(全5章 下巻)

原著タイトルの副題に“A Comparative Study of Key Philosophical Concepts”と記されているように、鍵となる哲学的概念が比較検討されている。比較検討の対象として取り上げられているのは、イブン・アラビーによる存在一性論(イスラーム哲学)と老子と荘子の老荘思想(中国哲学)である。井筒の著書は、文献学的・思想研究的な視座にもとづき、時間と空間を越えた「<sup>メタ・ヒストリカル</sup>超歴史的・<sup>トランス・ヒストリカル</sup>言い換えれば歴史状況を越境する対話」を試みている。そこに通底する「久遠の哲学」(フォロソフィア・ペレニス)を意味論的に導き出そうとする大胆な試みである。

井筒は難解なイブン・アラビーの思想を、後代のイブン・アラビー学派の思想家であったカーシャニーの枠組みを援用しながら分析する。イブン・アラビーの存在一性論の特徴は、通常、「アッラー」(アラビア語で「神」)を意味するものは、何

らかのかたちで限定された状態の絶対者でしかない。むしろ、言語を越え、いかなるかたちでも描写できない絶対性の状態にある超越的な絶対者が想定され、その絶対存在は「ハック」(ḥaqq 絶対者)と呼ばれる。存在一性論では、この絶対者が「神」、「一者」、さらに「世界」などの存在や名前を通して顕われる過程を、自己顕現(tajalli)と呼ぶ。

世界の創造物が存在であるかぎり、絶対者と「存在」(wujūd)のレベルでつながっているのである。

さらに、イブン・アラビー思想の有名な概念のなかに、「完全人間」(al-insān al-kāmil)という語がある。この語は、神が人間のうちに、己れをもっとも完全なかたちで顕現させたことを示すものである。すなわち、人間は被造物でありながらも、同時に絶対者の顕れでもある。マクロコスモスとミクロコスモスを、一つの個体に同時に湛える存在こそが人間—それゆえに完全人間—なのである。

翻って、老荘思想において、たとえば『老子』(『老子道德経』)と呼ばれる古典テキストを中心に宇宙を捉えなおすとき、「渾沌」こそが存在の本来的なあり方であり、存在世界の本源である。老子はこの捉えようもない「無名」の次元を「道」と呼び、その極致を探究する。「道」とは、「何かで在る」(有)も「何かで在らぬ」(無)も超えたものであり、まさしくイブン・アラビーの存在一性論における「存在」と形而上学的に対応する。

道家で用いられる「一なる者」の語は、イブン・アラビーの捉える「一なる者」、すなわち絶対的に「一なる者」(アハドの次元)と、多を内包した「一なる者」(ワーヒドの次元)のそれぞれを包摂している。その意味で、両者はともに隠された不可視界(道家における玄や、存在一性論におけるガイブ)から、それぞれを顕われを論じている。井筒はこれら隠された存在論的レベルとその顕われの仕方を、二つの思想テキストを交錯させながら読み解きつつ、厳密な意味論的分析によって議論を進めていく。

ちなみに、諸言語に通暁した井筒の意図を読み解きつつ、翻訳を行うことはきわめて骨の折れる作業である。もちろん、本書の翻訳に際しては、アラビア語と中国語に関する知見が不可欠である。井筒の諸著作を精読し翻訳した仁子寿晴氏は、イスラーム思想研究のまさに鬼才であると言えるだろう。筆者も仁子氏が担当する大学の講義を聴講したことがあるが、講義には学外の研究者も参加していた。ときに、授業時間以上に長い授業後の「雑談」では、翻訳の試行錯誤がしばしば話題に上がっていた。「訳者あとがき」の紙幅では語り尽くせていない、訳者と編集者の5年以上に及ぶ奮闘を素直に讀みたい。

